

ぬまぶくろ
沼袋遺跡発掘調査説明資料

財団法人山形県埋蔵文化財センター 平成 23 年 11 月 5 日

調査要項

遺跡名(番号)	沼袋遺跡(平成 13 年度新規登録)
所在地	山形県東根市大字長瀬字沼袋
時代・種別	奈良～平安時代・集落跡 中世・集落跡
起因事業	東北中央道(東根～尾花沢間)
調査依頼者	国土交通省山形河川国道事務所
調査機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
現地調査	平成 23 年 5 月 17 日から 11 月 17 日まで
調査面積	6,500㎡
調査担当者	調査研究員 菊池玄輝(現場責任者) 調査研究員 川崎康永 尾形知哉 調査員 安部将平 瀨田純 山田和史
調査成果(11月5日現在)	
検出遺構	奈良～平安時代: 竪穴住居跡 11 掘立柱建物跡 土坑 中世: 掘立柱建物跡 溝跡 土坑 井戸跡
出土遺物	奈良～平安時代: 土師器 須恵器 中世: 青磁 陶器(古瀬戸等) 近世: 陶器 磁器

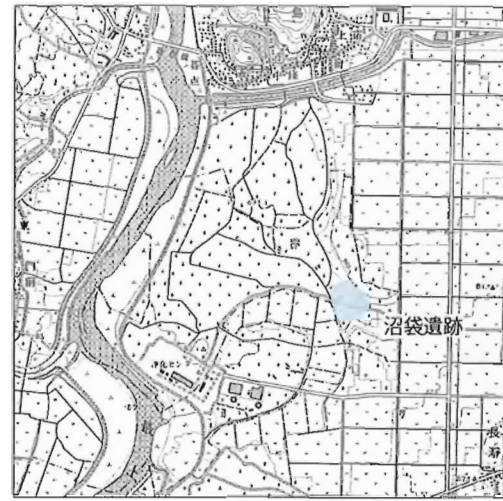


図1 遺跡位置図(1/50,000)

1 調査の概要

沼袋遺跡は東根市長瀬地区から北西に約 1.3km、最上川右岸に形成された標高 80m の自然堤防上に立地しています(図 1)。周囲の低地部は最上川の旧河道で、現在は水田として利用されています。旧河道を挟んで北側には八反遺跡、南側には中世の方形居館である長瀬本楯跡が位置しています。

平成 13 年度に山形県教育委員会が現在の市道(長瀬大久保線)を分布調査した結果、古代の竪穴住居跡などを確認しました。「沼袋遺跡」として新規の遺跡として登録されました。調査区は市道の北側(A区)と南側(B区)に設定し、合わせて 6,500㎡について調査しました。

2 見つかった遺構と遺物

調査区の 1/3 は河川に削られていたが、流路に沿った微高地で竪穴住居や掘立柱建物からなる古代の集落と、区画溝や掘立柱建物・井戸で構成される中世の集落が見つかりました。

竪穴住居跡は全部で 11 棟見つかりました。ST4 は深さが 80cm あります。ST59 ではカマド周辺から土師器や須恵器が多く出土しました。ST213 は 6m 四方の大型住居で、南と東の 2 箇所にかまどが作られています。住居のかまどの方向はほとんどが南向きですが、北や西を向くものもわずかにあります。また、出土した土器の特徴から住居跡は奈良時代と平安時代の少なくとも 2 時期に分かれます。

掘立柱建物跡の全容(柱穴の組み合わせ)はまだ定かではありませんが、多数の柱穴が密集して見つかることから、複数の掘立柱建物が復元できるものと考えています。

溝には深さ 1m 以上ある断面 V 字形の葉研堀のものがみつかりました。概ね南北と東西方向に伸びており、屋敷地を区画したものと考えられます。このうち、SD225 は上幅約 6m、深さ 1.7m あります。区画溝からは十字文の須恵器系陶器、雷文がスタンプされた瓦質土器の「風炉」(茶道具)など中世の遺物が出土しました。「風炉」は県内では小田島城など城館や寺院で出土が確認されているものの、集落からの出土は珍しい事例です。

河川は大小 3 筋が見つかりましたが、出土遺物や重複関係から SG1 は中世以降、SG2 は中世、SG3 は古代から中世の時期と考えられます。SG1 の上層からは瀬戸・美濃や青磁など近世の茶碗が出土しました。

3 まとめ

調査の結果、奈良～平安時代・中世にかけての集落と、それに連なる河川との関係が見えてきました。集落は奈良時代、平安時代、中世の大きく 3 時期に渡る移り変わりがあったようです。



写真1 調査区北側(A区)全景



写真2 調査区南側(B区)全景

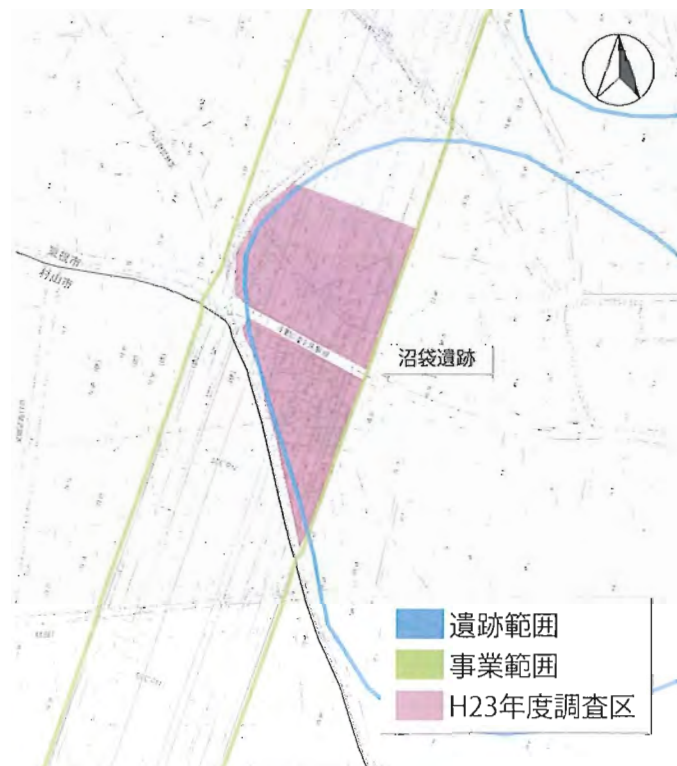


図2 調査概要図(1/2000)



写真3 ST59 竪穴住居跡 全景



写真4 ST59 竪穴住居跡 カマド



写真5 ST4 竪穴住居跡
カマド 断面



写真6 ST217 竪穴住居跡 カマド

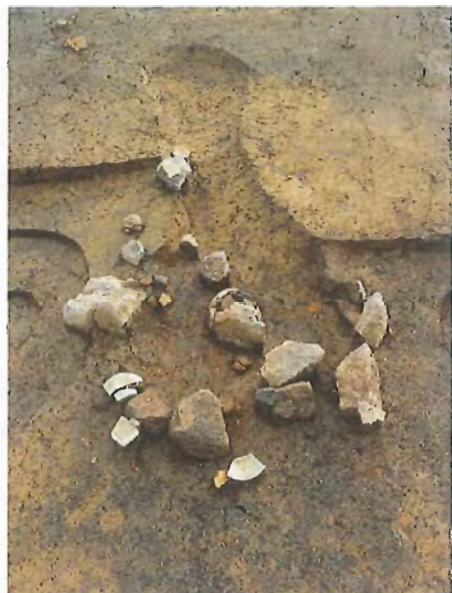
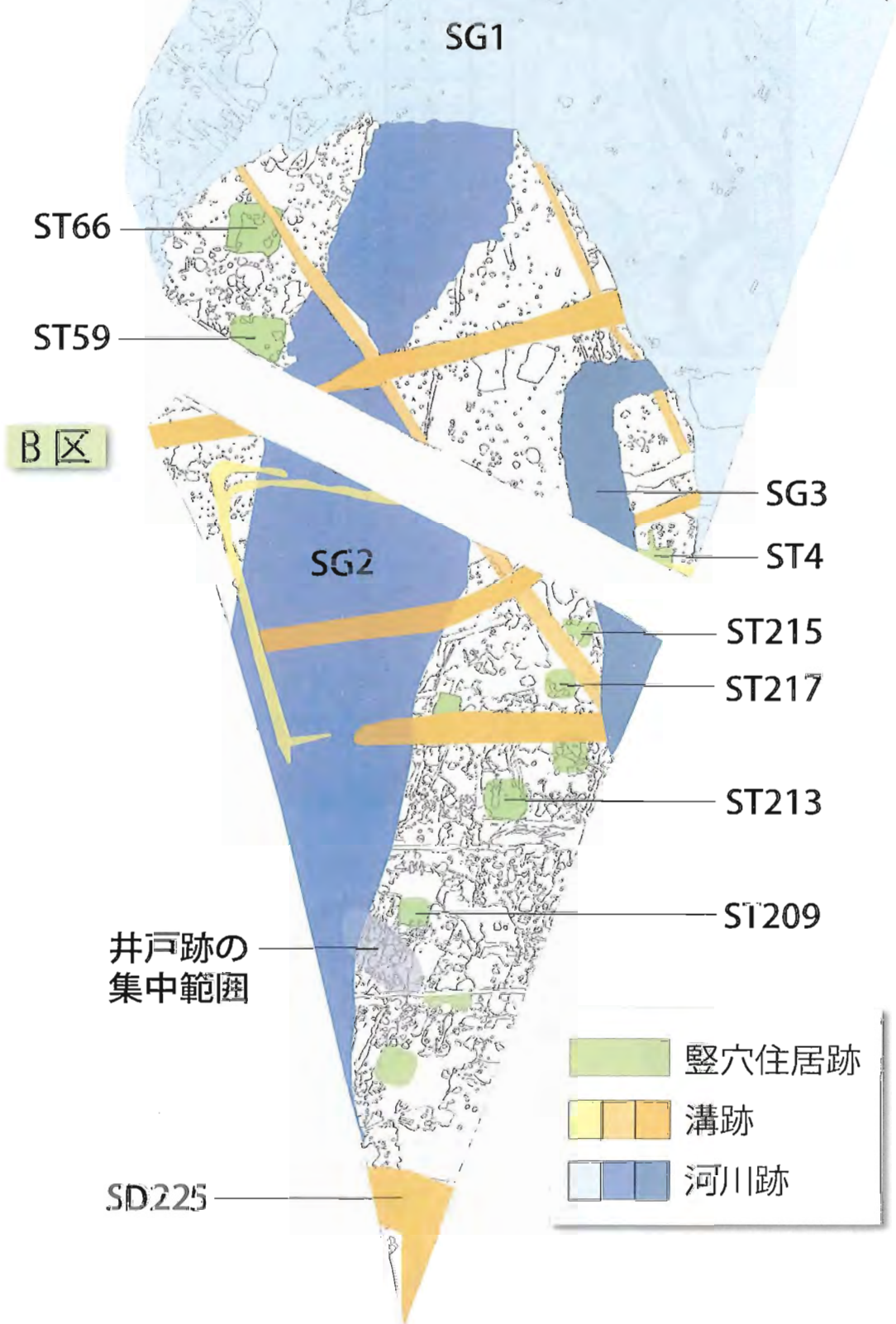


写真7 ST215 竪穴住居跡 カマド



写真8 ST213 竪穴住居跡 全景

A区



井戸跡の
集中範囲

SD225

- 竪穴住居跡
- 溝跡
- 河川跡

図3 遺構位置図 (1/600)



写真9 SG3 河川跡 土層断面



写真10 ST209 焼失竪穴住居跡 断面



写真11 SP277 柱穴 断面



写真12 SP295 柱穴 断面



写真13 SE327 井戸跡 断面



写真14 SE333 井戸跡 断面



写真15 SD225 区画溝跡 断面